

☆北海道医療大学 客員教授 石垣靖子氏

・長くホスピス看護に携わっていた私の尊敬する石垣先生のメッセージを、今回ご紹介致します。

聴くこと・つながること ナラティブの意味

私は20数年間ホスピス緩和ケアに携わる中で、多くの患者さんやスタッフに出会いました。

その人たちから教わったことは私の財産です。50代の安倍さんは膵臓がんと診断され、手術は試験開腹に終わり、予後2カ月と予想されました。体調が戻らず疑心暗鬼になり、その後偶然に診断書を見て予後を知り、新たな不安や恐怖を体験しました。

しかし医療者やご家族が寄り添うことで、わが身の境遇に折り合いをつけ、自分の人生を振り返って話す（ライフレビュー）ようになりました。

今を肯定し、残される家族への気配りができるようになる。その力は、誰かと共にあることで生まれたのであり、寄り添うケアのたまものです。

ケアに携わる者は患者さんの物語を聴くとき、その人生に触れることで、自分の人生を振り返り、自分自身の物語にも出会います。

ナラティブとは結局、患者でも病人でもなく、苦境にある人間に焦点をあてるから重要なのです。そしてナラティブは、語り手と聴き手に橋をかける＝関係づける行為です。

時間がないから話が聴けないと言いますが、たとえば清拭するとき、体を拭いてハイ終わり…では残念ですね。患者さんの人生に触れる機会はいつでもあります。

患者さんにとって誰かとつながること、関係づけられることは心強く、その人生に触れることがケアになります。

以前にも書いたかと思いますが、てのひらでは「ナラティブ」を大切にしていきます。

ライフレビューも同じで、病気だけみても、その方のこれまでの人生をお聞きしないと治療方針、関わり計画はたちません。

どんな事が好きで、どんな時に喜びを感じるのか、またどんな時が辛いのかなどなど、その方の世界観、人生観をしっかりと聞き取らないと、その方を理解できないのです。

相手の気持ちを分かろうとする気持ちをこちらが持つことが何よりも大切だと思っています。

「いのち」この世に一つしかない自分のいのちの時間を使って、今日も自分の心を燃やして周りを温かくしていけたらと…

「看取りの心」があるてのひらスタッフを心から信頼しています。

今月もお疲れ様でした。



※私ごとですが、初孫の誕生で、「いのちの輝き」を日々実感しております。

タレ目の私がさらにタレタレ目になってしまってます(加齢も関係あるのかな(^_^))

2022年10月7日

呉静恵 